



伏せ込みなくして開花結実なし

戦前百四十年型



青年会長・中山大亮様を囲んで ひのきしん隊家族入隊日の参加者(9月16日)

真明

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

やしきハかみのでんぢやで
まいたるたねハみなはへる
こ、ハこのよのでんぢなら
わしもしつかりたねをまこ
七下り目

お道を信仰していても、なかなか自分の思うように道が開けず、望み通りでないことばかりが現れてくる
ことがあります。「一生懸命やっているのに、どうして」と思うこともあるでしょう。

教祖のひながたは、最初の約20年は誰からも相手にされず、笑われ謗られ続けながらお通りになった道すがらでした。その中を教祖は、陽気に勇んで毎日をお通りくださいました。

花が咲き、実が実る御守護を頂くためには、その前に必ず伏せ込みがあるのです。人によっては、何年も待たねば芽が生えないこともあるでしょう。しかし、まず種を蒔いてしっかりと土に埋めなければ、芽も生えず、後の開花はありません。

ちばへの伏せ込みは、将来のおたすけ、御守護への理作ります。たとえおちばから遠く離れていても、心を真っ直ぐにおちばへ向けて御用に励めば、その真実は親神様がお受け取りくださいます。思うような御守護をお見せいただけなくとも、教祖のひながたを思えば、それは尊い伏せ込みの期間。先の結実を楽しみに、親元で精いっぱいひのきしんに励み、真実の種、喜びの種、勇みの種を蒔かせていただきます。

正面方

今や日常生活にスマートフォンは欠かせないが、スマートフォンアプリに万歩計があり、1日にどれくらい歩いたかをときどきチェックする。すると昨年の夏に比べて、今年の夏は、平均で1日1000歩以上少なくなっていたことに気付いた。酷暑で外出を控えてしまったようで、秋からもう少し積極的に動くようにしたいと思う。それにしても、スマートフォンを持ち歩くだけで1日の歩数が分かり、運動不足が分かるのは便利だなと思った。

ふと、もし1日に何回喜んで分かるアプリがあれば、心の成長にすぐ役立つのになと思った。私自身、日頃、陽気ぐらしとは言うものの、喜んで回数は意外と少ないかもしれない。

喜びを探し、また人様に喜んでもらったり、笑ってもらえるようにしていきたい。

《9月月次祭 挨拶》

信仰の原点に立ち返り ちば一条に心を正す旬

大教会長 井筒梅夫

皆様方には、日頃から熱心にお道をお通りくだされ、時旬の上にご丹精をいただきまして、誠にご苦勞様です。只今は9月の月次祭を共に勇んで勤めさせていただきましたことは、大変ありがたい次第です。

先月の末頃に、中学、高校の友人数名から、余命1カ月の宣告を受けて東京で闘病生活をしている同級生がいることを聞かされました。その彼とは小学校からの友人でしたので、何とか行かせてもらいたいと思いましたが、なかなか日がとれずにいたところ、予定が1日空いたので、東京におたすけに出向きました。

彼は小学生の頃から水泳の飛び込みを始め、16歳にしてオリンピックの強化選手に選ばれて、その次のオリンピックではメダル獲得を有力視されるほどの選手でした。ところが、元来の短気な性格が災いし、高校2年で退学となって、オリンピックへの道は閉ざされたのです。その後、東京へ出て板前の修行に入ったのですが、それでは物足らず、プロボクサーに転向しました。結婚後も何を思ったのか、「競艇に挑戦する」と言って、奥さんと子供を家におき1年間の研修を積んで、ボートレーサーになりました。小柄ながら運動能力の高さで次々とレースに勝って、賞金も大い

に稼いで、羽振りのよい生活をするようになったのです。

しかし、レースで首を骨折してしまい、その大けがから復帰したものの成績は振るわず、その憂さ晴らしにお酒に溺れてしまいました。奥さんと子供にも出ていかれ、アルコール依存症になって入院を繰り返すようになってしまったのです。そして、お酒を飲んでは友人や知人に電話をかけ、ぐちぐちと話すものですから、次第に敬遠されるようになり、知り合いからも見放されてしまいました。これが40歳の頃でした。

このどん底から息を吹き返したのが、おちばであります。彼が所属する大教会の会長さんが修養科を勧めたところ、これを素直に受けて、修養科へ入りました。彼も人生を立て直したいとの決心をして、3カ月間しっかりと伏せ込みました。修養科中に一度、許可を得て食事を共にしたのですが、充実した修養科生活を喜々と語ってくれました。そして東京へ戻ってからは仕事にも就き、いろいろなことがあったようですが、再婚もし、平穏な日々を送れるようになりました。彼はおちばでたすけていただき、人生をやり直すことができたのです。

それから20年以上が経ち、この春頃、体調を崩して病院を受診したところ、前立腺がんを原発巣に、至るところにがんが転移していることが判明したのです。かなり衰弱しているのかと心配して病室を訪ねますと、案外元気な姿で迎えてくれました。聞きますと、家族や親族はもとより、友人や知人、職場の人たちが次々と面会に来てくれ、写真もたくさん撮っておりまして。また前日に、所属の大教会長さんがおたすけに來られたということで、修養科を出てからの充実した信仰生活を垣間見た気がして、良かったな

と大変嬉しく感じました。約 1 時間、昔話に花を咲かせ、おさづけを取り次がせていただいて「元氣になったらおちばへ帰ってこいよ」分かった、おちばで会おう」と、おちばでの再会を約束して帰途に着きました。

身近に起こるさまざまな節を経験して、そこから再出発をするために大切なことの一つは、信仰の元一日にしっかりと意思を致して、元一日に立ち返ることだと思います。各々の教会にも家庭にも、そしてお互い一人ひとりにも、信仰の元一日があると思います。その奥を辿れば、そこには必ずおちばの存在があるはず。ようぼくとなつてたすけ一条の道をスタートするところはおちばですし、教会名称の理もおちばでお許しを戴き、おちばの理を頂戴して、陽気ぐらしの手本、たすけ道場としての理の役割が始まるのです。

また、信仰している者であれば、おちばで喜びを味わった、おちばで成人をさせていただいた、おちばで運命を変えていただいた、おちばでたすけていただいた、といった経験をお持ちでありましょう。お道の信仰の原点は、おちばにあることは間違いのないことです。

教祖百四十年祭への年祭活動中に、コロナ禍から再出発をすることになったことを思案すれば、今こそお道の信仰の原点に立ち返って、ちば一条に心を正す旬に違いないと思うのです。心をおちばに向けて足を運び、真実を尽したいと思います。

皆様方の心勇んだ時旬の道の歩みをお願いいたしまして、今月の挨拶とさせていただきます。

立教百八十七年 九 月 月 次 祭 祭 文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の深淵なる親心に護られて、日々を恙なくお連れ通り頂き、成人の道をお導き頂きまして、漸く今日の姿へとお育て下さいます御慈愛の程は、唯々有難く勿体ない限りでございます。私共は感謝と喜びの心で御恩報じに努め、教祖百四十年祭の旬の勤めに励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日はおちばより当大教会にお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同心を一つに合わせ、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、九月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と参き集いました芦津の道の子達が、勇み心も一人に、共々にお歌を唱和してつとめの理に添わせて頂く誠の心をお受け取り下さいます。親神様にもお勇み下され、時旬の道の進展を御守護下さいますようお願い申し上げます。

さて、今月の神殿講話は、学生層育成者講習会として、西浦忠一先生に、おたすけと若年層の育成についての講話を聞かせて頂きますが、これを年祭活動に一段と拍車をかける励みとさせて頂きます。

更には、この月を全教会布教推進月間と定めて実動に努めてまいりましたが、月末には恒例の全教一斉にをいがけデーが実施されます。こうした道の動きに相呼応して、この月この期間だけに留まらず、にをいがけ・おたすけを常日頃から心掛けて、陽気ぐらしの御教えの布き広めに丹精を重ねさせて頂きたいと存じます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、日に月に賜る御守護に感謝申し上げ、御恩報じの心でたすけ一条に真心を込めて努め働かせて頂きます。そして秋の大祭を仕切って、にをいがけ・おたすけ、修理丹精に励み、おちばへの種まきに精一杯の真実を尽くし運んで、今日の旬に相応しい成人の足取りを一手一つに心勇んで進めさせて頂く決心でございます。何卒、親神様には、教会長、ようぼくのたすけ一条の踏ん張りを、御心嬉しくお受け取り下さいます。大いなる御守護を以て時旬の御用に働かせて頂き、道の進展を御守護下さいます。一日も早く神人和楽の陽気世界にお導き下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《9月月次祭神殿講話 学生層育成者講習会》

教祖に凭れて

教えの実行を積み重ねよう

本部員 西浦忠一先生

24時間 教祖を思う

大相撲の7月場所は横綱・照ノ富士関が優勝しました。彼は伊勢ヶ浜部屋で、伊勢ヶ浜親方はようぼくなので、彼が横綱になったとき、『すきっと』という雑誌でインタビューをしました。

彼は23歳で大関になりましたが、怪我や糖尿病で序二段まで落ちてしまい、そこから復活して横綱になりました。「復活に向けてどんなことを心がけたのですか？」と聞きますと、彼は相撲部屋に入っ

気にもしていなかったその言葉を、どん底から復活しようとしている

ときに思い出した。「よし、24時間、全部相撲にかけてみよう」と思ったそうです。情性で稽古をすることのないように、毎日目標を定めてやる。必要なことを明確にしてトレーニングメニューをこなす。そんな毎日を繰り返しているうちに、それが癖になり、相撲が好きになってきました。身体だけではなく、心も鍛えられたのです。この話を聞いて、私自身はようぼくとして24時間教祖を思い、おすがりする毎日が送れているだろうか、と思いました。

夢を持つことは大切です。5年先、10年先、自分はどうなっているのか、教会はどうなっているのか。論達を拝読してなるほどと思

うだけではなく、定めた心定めを常に心に持ち、目標を持って通ることが大事です。

教祖は御存命

教祖が25年の定命を縮めて現身を隠されたのは、世界たすけを急がれたからです。そのたすけの具体的な方法として5つのことがあります。

1つ目はおつとめです。神一条になって勤めることをお望みになりました。2つ目はおさづけです。おさづけの理を広く渡され、世界たすけに積極的に向かうように促されました。3つ目はをびや許し

です。4つ目は証拠守りです。そして5つ目はお御供さんです。お御供さんは教祖殿で教祖の御前に供えられます。それは教祖が御存命であるからです。教祖に息をかけていただいて、私たちは御供として頂戴できるのです。教祖が御存命でいていただけるのは、本当にありがたいことなのです。

この道は、常々に真実の神様や、教祖や、と言うて、常々の心神のさしづを堅く守る事ならば、

一里行けば一里、二里行けば二里、又三里行けば三里、又十里行けば十里、辺所へ出て、不意に一人で難儀はさ、ぬぞえ。後とも知れず先とも知れず、天より神がしつかりと踏ん張りてやる程に。

明治20年4月3日

先人たちは、世上の無理解や誹謗中傷の中を耐えて、この道を広め、おたすけに奔走して、今日の道の礎を築いてくださいました。どんな辺所にあっても教祖がお出張りくださり、御守護くださることを確信して、実感して働かれたからでしょう。

時は流れ時代は変わっても、存命の守護は変わりない。教祖が御存命でお働きくださる。これほどありがたい、心強いものはないのです。しかし、いかに立派な教えがあり、素晴らしいひながたがあっても、それを守ろうとしなければ、無いに等しい。別席のお話にも、「この道は教祖のお説きくださりました御教えを実地に身に行うて通るのが第一つとめ」と教えていただきます。



論達には、「水を飲めば水の味がする」との教祖のお言葉があります。親神様の御守護をいつでも頂戴していることを感じ取って、「ありがたい。結構だ」と喜ぶこと。心の持ち方一つで、いつでも親神様の御守護を感じ、陽気ぐらしをすることが出来る。また、「ふしから芽が出る」と、成ってきたことは、成人を促される親神様の手引きだから、必ずお連れ通りくださり、成人させてくださると、先を楽しみに通ることをお教えくださいました。

自分ばかり、こんな目に遭わないといけないのと思うのです。しかし私たちは「そこにはどこまでも子供可愛い一条の親のメッセージが込められている」と、その理由を聞かせていただいている。このことを知らない人たちに伝えるのが布教であり、おたすけです。人はさまざまな出来事を通して、当たり前の素晴らしさを体感します。でも、当たり前だからすぐに忘れてしまう。人によって当たり前を信仰している者は教祖と出会い、ちゃんと教えていただいているのです。与えを喜ぶ、成ってくることを喜ぶ。それは教祖のひながたにあります。これは本当にありがたいと思うのです。

また「人救けたら我が身救かる」と、教祖は自分のことはさておき、人をたすけることを第一にお通りくださいました。我が身のことは親神様にもたれ切って通られたのだと思います。貧のどん底に落ち切られたときも、親戚や村人の嘲笑を受けたときも、官憲に拘引されたときも、すべて教祖は

神一条、たすけ一条のひながたとしてお通りくださったのです。

親神様の御守護を感じ取り、報恩の念を持って通る御恩報じ、親神様に凭れ切って通る神一条、そして人をたすけるたすけ一条。年祭活動では、この部分をしっかりと見つめ直し、ひながたの道を自身自身の道として心に定めていたいただきたいと思います。

おちばに繋がってこそ

教会長をはじめ、私たちはまずおちばに心を寄せ、足を運ぶとともに、ようばく、信者が教会に足を運び、親神様、教祖に繋がってもらえるよう、繰り返し足を運んで丹精に努めることです。おちばに帰ることは、本当に不思議を頂ける、たすかりの元です。

私どもの信者でN君夫婦がいるのですが、奥さんはある新興宗教を熱心に信仰している家庭で育ちました。彼の家の講社祭に行っても、奥さんは不在のことも多い。そんな彼女は生まれつき目と耳に障害を持っており、それがだんだん悪くなって視力が落ち、大学病

院で手術を受けることになりました。講社祭で彼女におさづけを取り次がせていただき、「しっかり神様を信じて、凭れさせてもらおうな」と声を掛けました。そして、私たちは毎日おちばでお願いづとめをするから、あなたたちも毎日お願いづとめをするよう、そして手術が終わったら必ず夫婦揃っておちばにお礼参拝に帰ってくることを約束しました。

ありがたいことに、元に戻らないと言われていた視力がだんだん戻り、眼鏡をかけると今まで以上に見えるようになったと喜んでいました。そして約束通り、昨年10月に夫婦揃っておちば帰りをしてくれました。

彼との出会いは、彼が18歳のときでしたが、友達もおらず、世間的な常識も何にも知らない状態でした。その彼が夫婦で私の家に来たとき、お供えと菓子折りを持ってきてくれた。さらに教祖にも御礼を用意してくれていたのです。お礼も言えなかった彼が、ここまですで成人してくれたのかと思うと本当に嬉しかった。神殿、教祖殿に

お礼に回り、教祖殿の合殿に座ったとき、御存命の教祖の温みを肌身を感じ、共に喜びました。

その翌月、彼の家の講社祭でしたが、奥さんからメールが来しました。「主人は急な仕事でいませんが、私がいますので、よろしくお願いします」と書いてあった。それまで彼女は講社祭に行っても不在のことが多かったのに、おちば帰りの後、そんなメールをくれるまでに成人してくれた。

やはりおちばに繋がってこそ、成人の姿をお見せいただけるのだと、また御守護とおちばに心を寄せる中にこそ頂けるものだと、改めて感じました。

真柱様は、「おおよそ道を信仰している私たちの活動は、すべておちばに繋がってこそ発展の御守護を頂ける」と仰せいただきました。私たちはおちばに身と心を繋いでこそ、成人させていただける。おちばに心を寄せ、足を運び、真実を込めて尽くし、運び、伏せ込むことで尊いおちばの理を頂ける。おちばの理とは「たすけてやりたい」という親神様の思いにあります。

元という、ちばというは、世界もう一つと無いもの、思えば思う程深き理。

明治28年10月11日

おちばは本当にありがたいところだと思っていました。

運命を変える一言

また、身近なところからお道のにをいを掛けることが大切です。

この道はいくら素晴らしい教えでも、人との出会いがなければ始まりません。そのためには、まず私たちが一にも二にも動くことです。親の思いを知らない人たちに、私たち一人ひとりが声を掛けていかなければ、N君のような人たちとも出会えない。

「一言のにをいがけが人の運命を変える」とも聞かせていただきました。去年の6月に、私が世話人をしている直属教会のある方が、部内教会長のお許しを戴かれましたが、その方は、まさしく一言の声掛けによって自身の運命が大きく変わった方でした。

今から11年前、その方は事業が行き詰まり、着の身着のままで、

夫婦で東北に行こうとあてもなく電車に乗った。途中、横浜駅に降り立つと、ちょうど全教一斉にをいがけデーで、駅前の公園でリーフレットを手渡された。そこに天

理教という文字が見え、「故郷」とか「お帰りのさい」と書いてあるのを見て、何か心に感じるものがあり、天理へ行ってみよう、となったそうです。電車を乗り継ぎ、野宿をして、翌朝、天理に辿り着いた。そして本部の神殿に着くと、境内掛が神殿を案内してくれて、

その後、神殿おたすけ掛に連れて行ってもらいました。そこで出会ったのが本部員の中田植彦先生でした。彼らは行くあてもお金もないので、中田先生の奥様のご実家である梅谷大教会を紹介していただいた。そこで約1カ月間、教会のお世話になったそうです。

その中で2人は修養科を勧められたのですが、修養科へ行くときに大教会の方が「またここへ帰っておいでや」と声を掛けてくださった。このとき男性は「俺には帰る場所があるんだ」という大きな安心感に包まれたそうです。

夫婦は修養科を終えて大教会に住み込み、5年後には、それぞれが布教の家に入りました。それ以降も夫婦で信仰を育む中、2年前、無担任教会の月次祭にお手伝いに通っていたとき、大教会長さんか

ら「その教会の会長になってくれないか」と声を掛けてもらったそうです。しかし1年間、男性は返事ができませんでした。いろいろと悩んだそうですが、彼が教会長を引き受けた決め手は、修養科へ通っているときに中田先生から、

「何年かして、君らが会長になる日を楽しみにしてるからな」との言葉でした。その言葉がずっと心に残っていたそうです。何とか御恩報じがしたかった。その頃、中田先生はご身上で寝ておられ、「今しかない!」という思いで、去年の6月、男性は教会長の任命の運びをし、その姿を見届けるかのように中田先生は翌7月にお出直しになりました。でも彼は、「あ、間に合ったと思った」と言うのです。教会長としてこれからお道の御用に励むことが、彼にとつての御恩報じです。

何気なく降りた駅で手渡された1枚のリーフレットが、夫婦をおちばへと引き寄せました。そして中田先生の一言が彼らの運命を大きく変えたのです。

にをいがけに決して無駄はありません。たとえ伝わらなくても理が残ります。種蒔き、伏せ込みだと思ふのです。まず声を掛けることが一番大切です。一人でも多くの方にこの素晴らしい教えを伝え、私たちそれぞれがおたすけの現場を持たせていただく。そしてたすけの元であるおちばに繋がってもらえるよう丹精させていただく。こうしたようばくとしての務めを果たしたいと思ふのです。

長い心で丹精を

真柱様は今年の年頭、「三年千日は準備期間ではなく、すでに本番であります。普段とは違う緊張感を持って歩む時であります」年祭へ向かって歩もうとする人を一人でも御守護いただくための丹精をしつかり進めていただきたい」とお諭しくださいました。

私も自分なりに丹精に心を尽く

していますが、ふとした時に、今は亡き母の姿を思い出すのです。母はおちばに繋がってもらうことが第一で、あの人、この人にたすけてもらいたい、日々心を尽くす人でした。

母がにをいがけをしたAさんという熱心な信者さんがいます。彼女は20人近くをようばくへと導き、熱心に信仰しておられる方です。今から45年前のこと、私のすぐ下の弟が喘息で生きるか死ぬかという状態でした。そんなとき、母は実家の父親から「信者さんを御守護いただきなさい。しつかりおたすけに出させてもらえ」と言われたそうです。

それで母が、憩の家ににをいがけに行くと、Aさんの4歳の次女が入院していて、手術を受けた後でした。母が病室ににをいがけに入っても、Aさんは断り続けたそうです。そんな中、同室の方々が次々と出直して、病室に娘さんと2人だけになり、寂しさもあって母の話を聞くようになりました。しかし、その1週間後に娘さんは出直してしまつたのです。

その後、Aさんは埼玉に帰つたのですが、母が手紙を送り、文通する中に、天理から埼玉まで訪ねていくようになりました。母は埼玉へ行って「わずかでもいいから毎月お供えで繋ぎを下さい」と丹精したそうです。そして少しずつお供えをしてくださるようになり、やがて奈良に転勤になつて別席を運び、身上、事情を見せられる中も熱心に信仰するようになったのです。

3年前にAさんの弟が肺がんになつたとき、Aさんは何とかおさづけを取り次ぎたいと、千葉にいる弟さんのところに行つたそうです。行きの新幹線の中で「あのと、奥さんもこんな気持ちで足を運んでくださったんだなあ」と思うと涙が溢れてきたそうです。

別席のお話に「日々尽くす理、運ぶ理より立つ理はない」と仰せくださいます。1度運ぶのと、2度3度運ぶのとは違うのです。理を作るとは日々運び、苦勞してこそできるのだと思います。特に人を育てる丹精には、長い心を持つことが大切です。

一年経てば一年の理、二年経てば二年の理、三年経てば三年の理。

明治22年4月17日

昨年1月、ありがたいことに、Aさんのお宅に神様を祀らせてもらうことができました。母も生前から神様祀りを勧めていましたが、ご主人がなかなか首を縦に振ってくれなかった。そのご主人の心が変わったのです。

日々の積み重ねと理作り

私たち信仰者にとって、地道な日々の積み重ねはとても大切です。私ども夫婦が名古屋で布教に出、4年目で初めてKさんというようばくを御守護いただきました。布教2年目に「こどもおちばがえり」団参をしたとき、ある娘さんが家に帰って「楽しかった!」と母親であるKさんに話をしたので、するとKさんがお礼に来て、「ご飯をご馳走させてほしい」とおっしゃって、食事に連れていってくださいました。非常に社交的な奥さんで、食事の後、スナックに連れていっていただきました。

そこでお酒を頂戴していると、トイレに行きたくなった。共同なので汚いトイレです。次に家内が行き、その後、Kさんが行って、帰ってくるなり妻の方を向いて「奥さん、掃除したの？」と聞いたのです。Kさんは店の常連ですから、トイレが普段よりきれいになったことに気付いた。妻は普段通り、トイレをサッと掃除したのでしよう。その行動がKさんの心にもすごく響いた。「天理教って何か違う。天理教の勉強をさせてもらおう」と思ったそうです。

それがきっかけでKさんは別席を運び、ようぼくとなって、今も布教地の講社に日参しています。何気ない日頃の心掛けが、おたすけに繋がった。妻は偉いなあと思いました。これが日々の教えの実行で、その積み重ねが成程の人になると思うのです。

私は小さい頃から、母が神殿のトイレ掃除に勤しむ姿を見て育ちました。そうした親の姿があるから、今の私たちがあり、Kさんも導いていただけたと思うのですが、数年前、ある方から、私の祖母が

毎日朝づとめの2時間前ぐらいから、教祖殿の掃除をしていたという話を聞きました。祖母は38歳で夫を亡くしました。私の父が高校1年生で、一番下の子供は生まれてまだ半年だったそうです。そんな大変な中を、おば一条、教祖一条に通ってくださいました。そのおかげで今の私たちがあるのだと、しみじみ思いました。後日、父との話をしていると、それは曾祖母から続いていることを聞かされた。代々の伏せ込み、徳積みのおかげで今があると、感謝せずにはおれません。

日々の教えの実行を、親から子、子から孫へと代を重ねて続ける中に、この道の信仰の醍醐味があると思います。いんねんを納消していただき、明るく陽気な道を親子揃って辿らせていただくためにも、代を重ねての長い歩みが必要です。子供に信仰を伝えるのは容易ではありません。私の母は強い信念を持って、共に動き、背中伝えてくれたと思うのです。

母が特に言っていたのは理作りです。私が教会に出向するときも

「元気でその教会に行けるのは、神様のおかげやで。神様の御守護がなかったら何もできない。だから理立てをさせてもらうんやで」と必ず言われました。また「理作りは水道と一緒にや。蛇口をひねったら水が出る。あれは水道管と繋がっているからや。御守護いただくのも、神様に働いてもらう道筋を作ることが大事やで」と、神様の働きがうまく運ぶことを分かりやすく教えてくれました。

日々尽した理は、年々月々皆受け取ってある。尽し、働き損にはならん程に。

明治34年4月24日

日々神様に心を繋ぐことが肝心です。そして、教えをそのままやってみる。素直な変わらぬ努力が真実の心として、間違いない御守護を頂ける元になります。

苦勞は宝

この三年千日は、親神様がお与えくださった成人の旬です。成人とは親の思いに近づくこと。子供の心は「もらって喜ぶ」で、親の心は「与えて喜ぶ」です。信仰的

に言うと、子供の心は「たすかって喜ぶ」で、親の心は「おたすけてして、たすかった姿を見て喜ぶ」です。たすかりたいからたすけたいへの心の転換、これが成人です。

私たちにできることは、しっかりと種を蒔くことと、肥やしをやることだけです。その旬を今与えていただいている。今時かずして、いつ蒔くのか。今動かずして、いつ動くのか。動けば必ず神様が働いてくださるのが今の旬です。

同じ畑に同じ種を蒔いても、早く生えるものと遅く生えるものがあります。「頑張っているのに、報われない」という人は、種を蒔いて育てているのです。種を蒔けば、収穫時期まで時間はかかりませんが、長い目で見れば、報われない努力はありません。

私は布教に出て4年目に初めてのように御守護いただきました。最初の1年、2年は苦しいという気持ちはありませんでしたが、3年目になると、「俺は何をしているんやろう」と、毎日悶々とした気持ちになるのです。本部の神殿

で知り合いに会々と、皆さん激励
をしてくれる。しかし最後に必ず
「ようぼくは何人できた？」と聞
かれるのです。それが嫌で、知っ
ている人が前から来たら隠れてし
まう。そして「なんで俺が隠れな
アカンねん」と思う。それぐらい
悶々としていました。

しかし、今振り返ると、この悶
悶とした思いは、今の私の宝です。
あの思いがあるからこそ、人の苦
しみや悩みを少しでも理解するこ
とができる。

布教地で講社祭を勤めています
が、毎月父が来てくれていました。
父は非常に真面目で、あまり喋ら
ない。例えば、参拝者が増えてい
たら、「今日は賑やかで結構やな」
と一言ぐらい褒めてくれたらいい
のと思うのです。でも、そうい
うことは何も言ってくれない。そ
の代わり、毎月必ず最後に「もつ
と苦勞を求めさせてもらえ」と言
って帰るのです。その言葉を聞く
たびに不足をしていました。

しかし、今となって、あの時の
父の言葉通りだと思うのです。今
は苦勞したくても、なかなかでき

ない。「苦勞は先の楽しみ。苦勞
は宝」と言う父の言葉が、今すぐ
く身に沁みるのです。教祖のひな
がたを自ら求め、苦勞を自ら求め
て通らせていただくことが大切だ
と思います。

辛い日は楽しみ。辛い日辛いと思
うから間違う。聞き分け。一
日という。辛い中、辛い理
より一つこのうあるまい。し
んなの中に実がある。楽の中に
実が無い。

明治32年12月6日

通らせてもらうときは苦勞でも、
通ったら必ず結構になるとお諭し
ください。皆様も、それぞれ
のお立場でさまざまな苦勞をされ
ていることと思いますが、その苦
勞は必ず宝になります。神様は尽
くしただけ、運んだだけの理は必
ず返してください。

にをいがけにおいても、自分に
できる精いっぱいの声掛けに励み、
それぞれの土地所からおぢばへの
思いをたぎらせて、御存命の教祖
にお喜びいただき、ご安心いただ
けるよう、つとめさせていただきます
ましょう。

(文責 編集部)

九月月次祭 祭典役割

| 九月月次祭 | | | | | | | | | | | | 祭典役割 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|--|------|------|--|-------|--|------------------------------------------------|--|----------------------|--|-----------------------------------------------------------------------------|------|-----------------------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|-----|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|------|--|-----|--|
| 祭主 | | | 扨者 | | 扨者 | | てをどり | | 地方 | | ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓 | | 三味線 胡弓 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 大教会長 | | 川畑澄博 | 瀧本庄司 | | 座りつとめ | | 大教会長 井筒文夫 守田清一 会長夫人 前会長夫人 井筒ちぐさ | | 奥田正徳 井筒敏成 山本義範 | | 奥田眞治 岡島秀男 岩切正教 今川政治 岡本公夫 竹内義忠 | | 今川和子 榎理恵子 瀧本基志枝 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 指図方 | | 賛者 | 賛者 | | 前 | | 瀧本眞二郎 梶川和隆 石川健郎 望月恵美 岩切孝子 梶川文子 | | 岩切正義 吉田裕和 河端芳雄 | | 加世田洋 立花善文 葭内浩之 西本義之 中村俊和 瀧本庄司 | | 山田秀子 竹内淳子 梶川りよ子 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 湯川正園 | | 木村真次 | 今川聖一 | | 後 | | 岡本久昭 花岡忠和 榎本康紀 山本広子 奥田千晶 梶川正美 | | 樋川泰士 吉田裕樹 望月慶太 | | 新居里実 梶川和人 村田光伸 川畑正博 宗我道明 比嘉幹洋 齊藤大幸 井上康広 山田大幸 段野涉 | | 岩切正教 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 献饌長 | | 岩切正教 | 伝供 | | 竹内義忠 | | 加世田洋 | | 岩切正義 | | 西本義之 | | 浜田宣郎 | | 中村俊昭 | | 岡本久昭 | | 花岡忠和 | | 新居実和 | | 西本興正 | | 村田光伸 | | 湯川正信 | | 川畑博 | | 榎本康紀 | | 瀧本亘人 | | 梶川和太 | | 望月征太 | | 梶川芳明 | | 宗我道明 | | 比嘉幹洋 | | 齊藤大幸 | | 井上康広 | | 山田大幸 | | 段野涉 | |

道の後継者の集いⅢ 第3次開催

10月5、6日の2日間にわたり「芦津 道の後継者の集いⅢ 第3次」を詰所で開催し、18歳から48歳までの54名（スタッフ対象者含む）が参加した。

この集いは、教祖百三十年祭後から次の年祭までの10年間で計画された、芦津に繋がる若者の育成活動の一つ。立教181年に「集いⅠ」、立教184年に「集いⅡ」が開催され、今年の「集いⅢ」では、教祖にお喜びいただける成人を目指してとのテーマのもと、論議に込められた真柱様の思いを学び、各々が自分にできるおたすけを見つけることを目指した。

参加者からは、「年祭活動の残り期間をどう通っていくかを言葉に出すことで、より意識するきっかけとなった」「今の自分を振り返るいい機会になった。同じ芦津に繋がる人々と仲良くなれ、頑張る力

をもらった。まずは自分できるところをしていきたい」といった声が聞かれた。

山田道弘・育成部長は「芦津に繋がる道の後継者が親里に参集し、教会になくてはならない人材となつてもらえるよう、育成、丹精の一助としてつとめてきた。この集いで得た陽気ぐらしの実践や信仰の喜び、自分にできる信仰実践を、今後の日々の生活に活かして、年祭活動を勇んで通ってもらいたい」と語った。



立教百八十七年 秋季 霊祭祭文

これの祖霊殿にお鎮まり下さいます、初代真柱中山眞之亮の霊様、二代真柱中山正善の霊様、初代真柱夫人中山たまへの霊様、本席飯降伊蔵の霊様、並びに芦津大教会初代会長井筒梅治郎の霊様をはじめ、歴代会長の霊様、眞明芦津の上に尽くし伏せ込まれました役員、教会長、ようばく、信者諸々の霊様、更にはこの度新たに霊代に書き記し合わせて祀る直轄ようばく湯川作次の霊様、直轄信者秋岡シゲの霊様、直轄信者秋岡フサの霊様、直轄教人秋岡やゑ子の霊様、直轄信者秋岡康一郎の霊様、直轄信者秋岡美恵子の霊様、東津部属畦川分教会役員坂井三郎の霊様、東津部属畦川分教会六代会長坂井米三の霊様、東津部属畦浜分教会三代会長吉田稔の霊様、大島分教会六代会長夫人加世田美代子の霊様、併せて壱千五百十九柱の霊様の前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

御本部四柱の霊様には、道の芯として神一条にご丹精下され、ようばくの先頭に立つたすけ一条にお勤め下さいましたお蔭を以て今日の道がごございます。又、初代梅治郎の霊様には不思議なお手引きによりこれの御教えにお引き寄せ頂かれ、爾来御恩報じに眞実を尽くし伏せ込まれ、大木の根の役割を果たされて、今日の眞明芦津の礎をお築き下さいました。又、夫々の霊様には親神様のお手引きのまに／＼眞明芦津の道の草分けの頃から、ならん中をも神一条に眞実を尽くしてお通り下され、或は国々処々に在っては、幾重のご苦勞ご苦心も厭わず、心勇んでたすけ一条にお勤め下さいました。これの道が年限と共に理が深まり、幾重の事情も乗り越えて、今日も変わらず御教え通りの道を歩み信心に励ませて頂けますのも、親神様、教祖の絶え間なき御守護と深き親心の現われではございますが、又一つには霊様方が永の年限、代を重ねて伏せ込まれた眞実の賜物と、朝夕御礼を申し上げて怠る時とてごさいません。その中にも今日のこの日は、今年の秋の霊祭を執り行う定めの日柄でございしますので、御前に種々の心尽しの物を供え、在籍者をはじめ、参き集う人々と共に、ご遺徳を偲び、ご生前のご丹精を改めて厚く御礼申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようばくは、霊様方が眞実を尽くされたたすけ一条のご丹精に、改めて御礼と感謝の心を深めて、教祖百四十年祭活動に拍車を掛け、まずは来月の大祭の節を仕切つて、一手一つに時句の御用に眞実勤め切らせて頂きたいと存じます。何卒、一同の句に尽くす真心を御心甘らにお受け取り下さいまして、成人の歩みを一段と進めさせて頂けますようお導きの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

全教会布教推進月間

布教部

例年9月に設けられている「にをいがけ強調の月」を、今年と来年は「全教会布教推進月間」として、本部布教部より打ち出された。これは、教祖百四十年祭に向けて、全教会が拠点となり、ようばくが1人でも多く実動できるよう、各教会の現状よりも一歩前に進んだ内容を目指すもの。それを受け、布教部（竹内義忠部長）は、「各教会の月次祭後に実動すること」「1人のようばくが3枚のリーフレット配布を行うこと」を実動目標として打ち出し、全国各地の教会で活発な「にをいがけ」実動が展開された。

豊野分教会（奥田眞治会



く人にリーフレットを配布した（写真左）。

原田会長は、「をやの声を一人でも多くの方にお伝えさせていただこうと、残暑厳しい中でしたが、皆勇んでつとめさせていただきました」と話した。

大教会では、祭典前日の夕づとめ後、4班に分かれ、周辺の神名流しを行った。

竹内部長は、「本部の声を受けて、各教会実動に励んでいただけたことと思います。この動きを止めることなく、各教会の常時活動となっていくように願います」と語った。



ひのきしん隊入隊

青年会

青年会芦津分会（井筒敏成委員長）は、9月2日から21日まで、おやさとふしん青年会ひのきしん隊に入隊。総勢106名（会員74名、OB他31名）がおちばでひのきしんに励んだ。

今年はひのきしん隊が結成70周年を迎えるため、芦津分会は会員70名を目標に動員に力を入れてきた。今年7、8月には常任委員が会員宅訪問で直接声を掛け、入隊を促した。また常任委員が期間を通して分散して入隊し、会員がいつでも入隊できるよう、受け入れ体制を整えた。その結果、未信者の方を含め、これまで未入隊だった会員が46名入隊した。

9月の主な作業現場は、境内地の清掃や整備作業、西駐車場付近の整地、本部中庭で使用するパイプ椅子のペンキ塗り、神饌物を栽培している大裏での農作業など多岐にわ



たり、残暑の厳しい中、おちばに伏せこみの汗を流した。

9月16日は年に1度の家族入隊日。夫婦や子供連れ、また学生会が参拝デーに合わせ入隊するなど、日頃の御守護に感謝を込めて、大勢がひのきしんに励んだ。

井筒委員長は「たくさんの方々の声掛けのおかげで目標の70名を達成することができました。OBの方々もご協力いただき、本当にありがとうございます。これを吉祥に、教祖百四十年祭に向けて、青年会活動をより活発にしていきたい」と語った。

秋季霊祭執行

9月24日、大教会神殿、祖霊殿で秋季霊祭が執行された。神殿で十二下りのおつとめを勤めた後、祖霊殿の儀。大教会長が祭文を奏上し、祭員列拜の後、在籍者、教会長、各会の代表者、この日合祀された祖霊様の関係者が祖霊殿前に参進し、参拝した。

秋季霊祭合祀

9月24日、秋季霊祭において新たに合祀されました。

湯川作次之霊

直轄ようぼく

秋岡やゑ子之霊

直轄教人

秋岡シゲ之霊

秋岡フサ之霊

秋岡康一郎之霊

秋岡美恵子之霊

直轄信者

坂井米三之霊

畦川分教会六代会長

坂井三郎之霊

畦川分教会役員

吉田 稔之霊

畦浜分教会三代会長

加世田美代子之霊

大教会婦人

大島分教会六代会長夫人

教務部報

教養掛 (9月)

主任

岩切 正義

教養掛

樋川 泰士・山本 義彦

梶川 文子

教人登録

林 昌子 (山城谷)

立教187年8月13日

おさづけの理拝戴《8月》

山田 勇起 (加島港)

岩切 大樹 (四ツ山)

田宮 尚江 (理風)

田宮 仁 (理風)

〔拝戴日順 4名〕

初席《8月》

《2名》加島港、理風、芦浪

《1名》直轄、青港、大正町、

紀志、小松ケ原、大

島、四ツ海、紀周

〔順序運びより 14名〕

計 報

笠松分教会二代会長夫人

(天保山部属)

中原直由美さんなからはなゆみ



令和6年9月24日出直された。享年72歳。

告別式は9月28日、原田晃雄・笠戸分教会会長斎主のもと、山口県下松市の会館で執り行われた。

昭和27年広島県呉市で生まれ、昭和45年桜ヶ丘高校卒業、同50年おさづけの理拝戴、同53年修養科第44期修了、同54年教人登録。

会長夫人として中原等会長

お詫び・訂正

真明656号「教務部報」

初席《6月》

《1名》當別

記載漏れがありました。

真明657号「教務部報」

初席《7月》

《1名》東津↓本津

の誤りでした。

お詫びし、訂正致します。

を支えつつ、ようぼく、信者の丹精に励まれた。また上級へのひのきしんも怠らず、菜園で自ら育てた野菜を神饌に献じるなど真実を尽くされた。

月例統計 (自令和6年1月1日) 至令和6年8月31日)

| 項 目 | 初 | の | 修 | 教 |
|--------------|-----|--------|------|---|
| 名 称 () 内教会数 | 席 | おさづけ戴け | 養科修了 | 人 |
| 大 教 会 (1) | 9 | 7 | | |
| 東 津 (13) | 5 | 1 | | 1 |
| 吉 野 (23) | 5 | 2 | | |
| 島 原 (29) | 8 | 1 | | 1 |
| 日 方 (16) | 17 | 3 | | 1 |
| 稗 島 (15) | 8 | 4 | 1 | |
| 本 津 (7) | 4 | 1 | | |
| 日 高 (2) | 1 | 1 | | |
| 始 良 (5) | 1 | | | |
| 津 和 (12) | 3 | 3 | | |
| 門 司 (6) | 3 | | | |
| 當 別 (6) | | | | 1 |
| 大 島 (26) | 18 | 8 | | 2 |
| 沖 縄 (3) | 2 | | | |
| 尼 崎 (2) | 1 | | 1 | |
| 四 山 (5) | 2 | 2 | | |
| 大 冠 (2) | | | | |
| 島 下 (1) | | | | |
| 天 山 (3) | | | | |
| 青 木 (1) | | | | |
| 芦 浪 (1) | 4 | | | |
| 甲 邊 (1) | 1 | | | |
| 芦 華 (1) | | | | |
| 天 津 (1) | | | | |
| 入 江 (1) | | | | |
| 豊 野 (1) | | | | |
| 紀 周 (3) | 9 | | | |
| 勝 明 (1) | | | | |
| 神 島 (1) | | 1 | | |
| 兵 庫 (1) | 2 | | | |
| 芦 ノ 郷 (2) | 2 | | | |
| 本 明 (2) | 1 | 1 | | |
| 明 道 (1) | 4 | | | |
| 芦 東 (1) | | | | |
| 和 鎮 (3) | 3 | | | |
| 神 本 (1) | | | | |
| 明 彰 (1) | | | | |
| 真 彰 (2) | 12 | 3 | | 1 |
| 本 氣 (2) | | | | |
| 芦 明 (1) | | | | |
| 真 伯 (1) | | | | |
| 合 計 (209) | 125 | 38 | 2 | 7 |